

ストーリーで巡る

天和駅周辺の歴史文化

真木村と鳥撫村が合併する際、真木の「真」、鳥撫の「鳥」を合わせて「顛」とし、仲良くするよう「顛和」と名づけられた地区の歴史文化ストーリーをご紹介します。

ストーリー 1 播磨・備前国境と交通路

赤穂市は、昭和 38 (1963) 年 9 月に当時の岡山県和気郡日生町福浦を越県合併しています。そのため、この地区は播磨国と備前国の境界を含んでおり、それを示す文化財が多く残されています。

江戸時代の国境界は漁業権をめぐるしばしば対立が起き、播磨灘に浮かぶ小島(取揚島)を池田輝政が取り上げた上で国境を設定したと言います。網崎の国境部については『播州赤穂郡志』(1727 年完成)の「網崎ノ浜ニ備前国界の標石アリ」とあるのが初見です。現在の石標は明治 9(1876)年に建てられたもので、同様の石標が取揚島上にも建てられています。

また、鳥打峠を境とした交通路は、現在もそのほとんどが道路として残されており、街道沿いに建てられた寺院や神社、地蔵などが多く残されています。



播磨備前国境石(網崎)

ストーリー 2 開拓ものがたり

かつての天和駅周辺は、海が山際まで入り込む平野の少ない地形でしたが、近世から現在に至る干拓・開発によって、現在の景観ができあがりました。

江戸時代はじめ、この地を開発したのは播磨 52 万石を支配した池田家で、西浜塩田を開発したことがわかっています。当時の絵図によれば、木生谷村、折方(織方)村、鳥撫・真木村にはそれぞれ「塩浜(塩田)」が記されており、小規模ながら塩づくりを行っていました。

次に正保 2(1645)年に赤穂に入った浅野長直は、銭戸島を削って大規模な造成を行い、約 100ha の戸島新田を開発しました。この時引かれた用水は旧赤穂上水道か

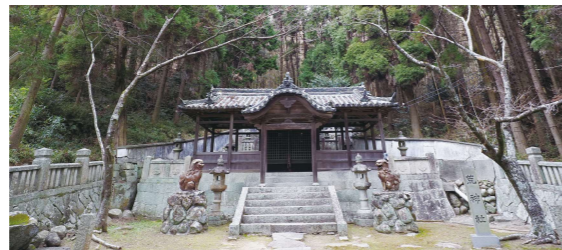
ら分岐させたもので、現在も戸島新田を潤しています。

その後大きく開発が行われたのは江戸時代中期以降の森家支配以後で、宝暦 9(1759)年の八田浜開発を皮切りとして、最終的に西浜塩田は 250ha の規模にまで拡大しました。天和駅南側にも銭島浜が開発されています。

このほか、大正 8(1919)年に藤原兵太郎が主導した 20ha に及ぶ藤原新田の開拓があり、現在見える土地自体が、400 年前からの先人の努力によって成し遂げられたものであり、その心のよりどころとして各村に現在も村の鎮守や寺院が点在しています。



顛和耕地整理記念碑・真木開拓記念碑・延命地蔵



鳥撫荒神社

ここに掲載したストーリーは「赤穂市歴史文化基本構想」の成果をまとめたものです。



かつての西浜塩田範囲と浜名 ※破線は推定含む。

令和 4 年 2 月 赤穂市教育委員会